

# HY-Tec Net通信

企業間・産学連携による新技術・新事業の創出

第 11 号

【 2002年 10月】

発 行 者

本荘由利テクノネットワーク

## CONTENTS

### メッセージ

ご挨拶  
活動経過の報告

代表代行 細矢 育夫  
幹事長 須藤 一知

### 特集

第3回HYKK異業種交流フォーラムの報告  
" "  
本荘由利地域企業の研究開発事業ヒアリング調査

幹事 齊藤 民一  
幹事 佐々木英功  
ドイツ・ハンブルグ工科大学 ヘルシュタット教授

### 「学」会員PR

私からのメッセージ

産学共同研究センター - コーディネーター - 渡部 充  
秋田大学工学資源学部長 吉村 昇  
秋田県立大学システム科学技術学部  
機械知能システム学科コンピュータ援用設計学講座 教授 日置 進  
秋田県立大学経営システム工学科経営情報システム学講座 助教授 嶋崎 真仁

### 「企業」会員PR

天寿酒造(株)  
大沼組(株)

### 地域情報・インフォメーション

編集後記



HY-Tec Net 代表代行  
(株)三栄機械  
代表取締役 細矢 育夫

## ご挨拶

HY-Tec Net 代表代行  
(株)三栄機械 代表取締役 細矢 育夫

このたび、諸般の事情により退任されました門脇寛治 HY-Tec NET 代表の後を受けて、今年度の残期間を代表代行としての任務を務めさせていただくことになりました。

「本荘由利テクノネットワーク」は2000年9月29日に発足し、丁度満二歳の誕生日を迎えたところであります。

この間、久津輪初代代表の基に、設立宣言書にうたっております本荘由利の広範な業種分野の技術者、研究者、市民の有志が自主的相集い、この地域の産業界の活性化と科学技術の振興による地域づくりに向けて、共に研鑽し、相互に連携しあうとともに積極的な情報発信を行う場と位置付けて宣言し、その目的実現のために幅広い人的広がりのもとで展開してきました。具体的には、環境リサイクル研究会、生産技術研究会、の二つの分科会を発足させ、着実な実績の積み重ね

をしています。或いは又、共通する目的をもって活動を展開している地域との交流を図りながら、新たな可能性を求める目的で、横手、北上、釜石地区との交流を積極的に進めているところであります。さらには、HY-Tec Net 通信を通じて多くのすばらしい皆様からのメッセージを会員各位に伝えております。

現在、わが国の製造業を取り巻く環境の変化には、これから先、どの方向に向かって行くものか、行くべきなのか正に不透明の中にあります。この様な厳しくそして又、新しい可能性を迫らなければならない時代にこそ当ネットワークの目指すところ「新しい時代の創造、新しい産業の創出」へと、メンバー各位の知恵と力を出しあって展開していかねばならないと考えております。このテクノネットワークが、一段と高いパワーを発揮する為に、会員各位の一層の御協力と積極的なご参加をお願い申し上げまして代表代行就任のご挨拶とさせていただきます。



HY-Tec Net 幹事長  
 (株)秋田新電元  
 開発部部長 須藤 一知

## 活動経過の報告

HY-Tec Net 幹事長

(株)秋田新電元 開発部部長 須藤 一知

### 「代表代行に細矢氏選任」

第10号で門脇代表辞任と代表空位について連絡いたしました。その後、緊急役員会を開催し今後の進め方について打ち合わせをいたしました。その結果、細矢副代表（三栄機械代表取締役）に来年6月の総会まで代表代行を務めていただくことになりました。当紙面で正式に会員の皆様にご連絡申し上げます。また、細矢副代表には快くお引き受けいただきましたこと、あらためて感謝申し上げます。今回の代行制度は会則にはございませんが、緊急措置として役員会全会一致で決めたものです。会則の不備、及び会員の皆様への連絡が事後となりましたことお詫びいたします。

### 「H14年度地域産学官連携プロジェクト形成促進事業」に採択

東北産学官連携協議会の事業（表題のとうり）において、当会の環境・リサイクル研究会活動における「ゼロエミッション・ネットワーク形成研究事業」が採択となりました。現在ゼロエミッション分科会を発足し活動しているテーマであります。11

件の申請に対し4件が採択となっており、秋田県ではA I Tの「真空成膜研究会」

も採択となりました。助成金は多くはありませんが、当会の活動の進め方が外部から一応認められたという点で嬉しく思っております。この分科会はこれから会員企業様の廃棄物の実態調査、その分析、先進地域の調査等を進めていきます。その折は是非ご協力をお願いいたします。

### 「ハンブルグ工科大学ヘルシュタッド教授によるヒアリング実施」

9月5、6日ハンブルグ工科大学ヘルシュタッド教授と東北大学大学院長平教授による由利地域5企業のヒアリングが実施されました。開発の成否は事前の準備に大きく左右されるという考えのもと、これを証明するために5企業の開発システム等について、実際の開発事例に沿ってヒアリングが実施されました。当社の場合は英語を話せる人がいないため、意思疎通に若干の問題はありましたが、今回のテーマ以外にも色々お話を聞かせていただき、楽しい時間を過ごすことが出来ました。詳細は同行された渡部先生の記事を参考願います。

### 「第3回HYKK異業種交流フォーラムに参加」

10月25日に岩手県釜石市で第3回HYKK異業種交流フォーラムが開催されました。このフォーラムには、細矢代表代行、久津輪顧問他12名が参加しました。フォーラムの内容については、斉藤幹事、佐々木幹事の報告をお読み下さい。

今後の活動予定としては、12月6日に秋田大学地域共同研究センター及び（財）本荘由利産業科学技術振興財団との共催で「第5回テクノ活性化セミナー」、12月13日は精密工学会東北支部との共催で「技術講演会」を開催します。内容について末尾のインフォメーションコナをご参照下さい。会員皆様のご参加をお願いします。



第3回HYKK異業種交流フォーラムのポスター

# ～～ 特集：第3回HYKK異業種交流フォーラム～～



HY-Tec Net 幹事  
(株)三栄機械  
常務取締役 斉藤 民一

## 第3回HYKK異業種交流フォーラム内容紹介報告 HY-Tec 幹事 (株)三栄機械 常務取締役 斉藤 民一

去る10月25日に第3回HYKK異業種交流フォーラムが釜石の「三陸海の博覧会記念館」で開催されました。主催者代表の挨拶に続いて、基調講演を東北大学大学院工学研究科教授 堀切川一男氏より「産学連携による事業成功の秘訣」と題した講演がありました。先生の専門は摩擦、磨耗、潤滑に関するトライボロジー。ジャマイカチームに負け、長野冬季オリンピックに向けて危機感を抱いた日本ボブスレー連盟から科学的な方法での立直し要請を受けて国産初のランナー（そりの刃）の開発と製作、スタートの方法等で日本チームに多大に貢献した話。田んぼに付加価値をつけ、農家の長男しかベンツに乗れない時代を早く実現したいと、米ヌカの米油の絞りカスからRBセラミックの工業材料を開発、この材料から無潤滑の直動すべり軸受け（リニアガイド）や滑らない靴底の商品事業化等、産学連携の事例では面白可笑しく聞かす人を引き付けて離さない楽しい時間であった。

又、先生は日本の現状と将来に次のような提言をされた。日本は基幹産業を育成して外貨を稼いで経済大国になった。基幹産業は繊維、鉄鋼、造船、自動車、電子情報（IT）と続いてきたが今後大きな幹となる基幹産業は出現しないだろう。この基幹産業をもの造りで支えてきたのは中小企業であったが、もの造りが東南アジアに流出し、空洞化によって中小企業の倒産、廃業が大きな問題となっている。基幹産業も成熟化が進みこれ以上大きくなりにくくなっており、新規産業に進出すべく分社化が始まったのが実態。日本ではミニ産業を沢山つくらないと、経済はどんどん疲弊していくので、将来ベンチャー産業が集積してくると思われる。ベンチャーは誰が作るのか？日本では2種類の集団、大企業分社化型と中小企業の一部が体質転換するベンチャー企業。大企業の強みは技術力と営業力、軍資金はバツグンだが不足しているのは経営力と意欲が？。

中小企業は軍資金がないために技術力、技術の幅を展開する余裕がないのと、営業力が不足している。

しかし、経営者と従業員のやる気はバッチリ。産学連携の意味は技術力でバックアップができるし、官は軍資金を地場産業の育成という立場で支援し、残る営業力をどうクリアするかが課題。これからのベンチャー産業の中身は生活生命密着型の産業がくる。長生きする話とか快適な暮らしにつながる話でないと新規産業としては難しいのではないかと考えている。新規産業に参画していくのに産学官銀報民の連携が大事、産学官は製品開発までは何とか成るが、売っていかなければならない。

売るためには新しい戦略が必要、報道機関が社会へ開発状況を伝えることにより距離を約める等役割が増える。銀行の方も開発と販売両方に支援する必要がある。従来の地域産業は色々な分野の下請けが密集したデパート型の町と企業城下町に二分されるが従来型産業の成長が苦しいなかで地場産業をどうつくるかについて、コアとなる地元のリーディング中小企業一社をつくり廻りの中小企業が協力しミニ産業をつくりあげていくのが良いとの提案、最後には人生を幸せにするLove Map 幸せのS字曲線の話で締めくくった。続いて(有)多田自然農場の多田代表の「地域資源を活用した事業可能性」と題した事例発表と各地域の代表者による活動報告で閉会し場所を陸中海岸グランドホテルで交流会が行われました。



フォーラムの講演会

翌日は釜石、大槌地域企業間交流推進協議会のメンバーの案内で釜石大観音、鉄の歴史館、鋳工業海洋生物利用技術研究センター、岩手県水産技術センターを見学し昼は釜石地区で開催中の物産展「釜石まるごと味覚フェスティバル」で三陸の海鮮どんぶりを食し、盛りだくさんの二日間でした。





HYTEC Net 幹事 積進工業(株)  
取締役 佐々木 英功

## 第3回HYKK異業種交流フォーラム事例紹介、 情報交換会、交流会の報告

HYTEC Net 幹事  
積進工業(株)取締役 佐々木 英功

基調講演後の、事例発表、情報交換、その後の交換会について報告します。

### 事例発表

釜石・大槌地域企業間交流推進協議会同和鍛造株式会社釜石事業所小野寺総務部長より、地域新生コンソーシアム研究開発事業「生態適合性に優れたCo-Cr-Mo合金の高機能化とその加工技術」についての報告がありました。

内容は、「整形外科、脳外科形成外科、心臓血管外科医等の医療現場において使用される板形状の高機能生体材料Co-Cr-Mo合金を提供する」ことを目的とし、経済産業局から委託を受けた(財)釜石・大槌地域産業育成センターからの再委託で岩手大学工学部、同和鍛造(株)、(株)フェローテック精密、共立医科器械(株)の協同で研究を進めているとのこと。

既存のCo-29Cr-6Moは難加工性であるが、高温鍛造技術によりCo-29Cr-xMo合金を鍛造することにより高機能化に対応しようというものです。鍛造による厚板製造技術、精密加工技術、特性評価、開発製品の絞込み等、各社の得意分野をうまく融合させ展開している事例と思いました。1000億円市場を狙ったものであり、その事業化に期待を寄せられています。

### 情報交換会

北上、横手、本荘の各地域の活動状況を交換し合うものであり、その内容をカ条書きで掲げます。

北上ネットワークフォーラム(K.N.F) 小原副代表よりの報告

- ・平成12年3月の設立であり、発足時72の会員、現在は93の会員であること
- ・「K.N.F」講座、「マスターズ21」と称して独自の勉強会を通年行っていること
- ・関東自動車工業との連携推進検討会を開催していること

秋田県南工業振興会 佐藤事務局よりの報告

- ・平成5年の設立で、現在大曲、横手、湯沢の3市3郡の法人、団体の約200弱の会員であること
- ・セミナー情報の会員への提供、ナイトファーム(夜お酒を飲みながらの勉強会)を開催したこと
- ・昨年度から横手インランドテポ活動を引き継いでいること
- ・会としてプロジェクターを設け、会員への貸し出しを開始したところ、十数件の実績があったこと

### 本荘由利テクノネットワーク 須藤幹事長よりの報告

- ・「未来をひらく新エネルギー-フェア-'02」を11月2、3日(県立大学潮風祭と同日)本荘由利産学共同研究センターにて開催にあたり、フェア参加の呼びかけ
- ・現在会員は約202と当初の132会員より増加していること
- ・コンソーシアム事業として秋田県立大学と、三栄機械、小林工業の共同研究が採択されたこと
- ・生産加工研究会で光ファイバメカニカルプライスの勉強会、環境リサイクル研究会に於いてゼロエミッション研究を県立大学と一緒に進めているとのこと。
- ・15回になる通信書、メーリングリストの活用をはかっていること
- ・今後は、中国について研究(競合、市場、アライアンス)を進めていくこと

### 交流会

産業育成センターから陸中海岸グランドホテルに場所を変え、交流会をおこないました。釜石市長をはじめ60名強の参加です。鈴木会長による釜石の地ビール「海のビール」で乾杯を行い、和気あいあいのなか、地元企業の商品説明会(即売会に早や代わり?)などがあり、瞬く間にお開きの時間となったように思います。また、交流会では多くの方の話を伺い、物の視点、考え方を勉強させられました。特に「仕掛けを作り実践する」の大切さを感じました。何かとぱっとしない時代ではありますが、交流会の熱気、情熱をもってこの難局を乗り越えたいと思います。交流会の最後に「明日があるさ」を出席者全員で輪になりながら歌ったことは、ことさら忘れられないです。



須藤幹事長からの活動報告



小野信一釜石市長の歓迎挨拶



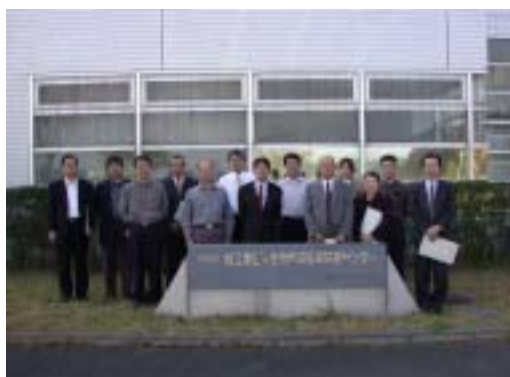
釜石の企業が開発した  
「クラフトマンスト-ブ」がR紹介



HYKKのテ-マソング  
「明日があるさ」の大合唱



(株)鉾工業  
海洋生物利用技術研究センターにて見学研修



海洋生物研究センター-長の 藏野氏と



釜石大観音に景気回復と商売繁盛を祈願



Prof. Dr. Cornelius Herstatt

Technical University of Hamburg-Harburg

[Herstatt@tu-harburg.de](mailto:Herstatt@tu-harburg.de)

中央がヘルシュタット教授、隣が東北大学長平教授

(株秋田新電元において)

## Managing the “Fuzzy” Front End of Innovation

### – Impressions from an explorative Study of Japanese and German Companies

In September 2002 I had the opportunity to carry out in depth-interviews with Managers of some 14 Japanese Companies about how these companies organize and manage their (front-end) innovation activities. These interviews also covered a small group of Companies in the Honjo-district.

This research was sponsored by JSPS and strongly supported by Prof. Nagahira from MOST at the Tohoku-University. It is part of an exploratory research study, comparing Japanese and German Companies.

Despite the small sample size and different sampling methods in Germany and Japan, our study reveals some interesting results. Contrary to former studies, the fuzzy front end of 14 projects studied in Japan and 14 projects studied in Germany was predominantly managed proficiently.

Market uncertainty and technical uncertainty were reduced prior to development in most cases. But we observed some cases, where especially Japanese companies experienced difficulties to organize market-research appropriately leading to clear and specific customer-/market-information prior to starting development and production. This problem was partly caused because these companies either have no experienced market-research-group in-house available or are instructed by the headquarter-based marketing, which is not in close touch or sufficiently connected with (regional) development teams.

Another impression we had was that some of the small and medium-sized Japanese companies are not yet prepared to market their innovations outside Japan. But if these companies want to enter the world-market with their innovations, they have to build up the necessary resources. One way to organize this is to integrate a business-development function into their innovation teams. This function should be ideally fulfilled by Japanese managers, who had the opportunity to collect international business experience for some time.

But besides and in general, most projects we observed, reached the majority of objectives and were managed professionally.

Yet, with regard to efficiency, a different approach was identified in the Japanese compared to the German projects. Whilst Japanese projects relied on a thorough planning and strict controlling to minimize deviations from front end specifications and enhance efficiency, in German projects all relevant functions are integrated early in the process, partly already during idea generation, to ensure that all information and points of view are taken into consideration right from the start. Responsibilities are assigned during the front end and rarely changed during project execution to reduce deviations and enhance efficiency.

I am very grateful for the opportunity to carry out this research in Japan, and I am deeply impressed by the friendly and open atmosphere during all my interviews as well as the professional attitude of the companies I was allowed to talk to.





HY-Tec Net 事務局参与  
本荘由利産学共同研究センター  
コーディネーター 渡部 充

地域企業ヒアリング調査の所感について  
HY-Tec Net事務局参与  
本荘由利産学共同研究センター 渡部 充

9月5日、6日の2日間、東北大学の長平彰夫教授とドイツのハンブルグ工科大学技術イノベーション学科長コーネリウス・ヘルシュタット教授と一緒に地域企業5社を訪問した。

目的は日本とドイツの中小企業における新商品開発の実体を調査し、両国の比較をする事であった。この調査は日本政府の支援により、東北大学とハンブルグ大学の共同研究として行う事になり、東北大学未来科学共同研究センター（通称NiChe:ニッチェ）の長平教授（当HY-TEC Net顧問）が担当者に決まったので、本荘由利地域を調査対象として選ばれたようである。

調査初日は、午前にはアルファエレクトロニクス(株)、午後は小林工業(株)と(株)三栄機械で計3社を訪問した。二日目は午後に三浦電子(株)、午後は(株)秋田新電元を訪問した。

研究調査テーマが『商品開発におけるファジイ・フロント・エンドのマネジメントの成功要因』（注：ファジイ・フロント・エンドのマネジメントとは商品研究開発の前段階における、様々なビジネス要因についての下準備の段階において、どれだけマネジメントをきちんと行ったかで、商品開発の成功率や市場での売れ行きに差異が出てくるのではないかとこの考え方で）、最近欧米の大学等で研究が進められているが、日本ではまだそうした実証研究は行われていない。各社を訪問し、直接口頭で質問応答の形で調査したわけであるが、調査したヘルシュタット教授が、どのように感じ、また各社の印象について質問したところ、ドイツの企業では新商品を開発する場合、必ずプロジェクトチームを作り、市場調査とディスカッションを充分に行って結論を出し、新商品を作るとのことであった。訪問した5社はそれぞれ独特のやり方で新商品を開発している事に変な興味をもたれたようであった。各社それぞれ2～3時間かけた質問応答であったので、充実した内容の話し合いが出来たと思われる。私自身、これまで経験した事のない貴重な勉強をさせてもらい感謝している。企業はそれぞれの努力により、独特の商品開発のやり方をもっていることを実感した。企業のトップおよびリーダーの哲学がいかに社員の方々に理解され、浸透しているかが会社の発展につながっているのではないかという感じが強くした二日間であった。

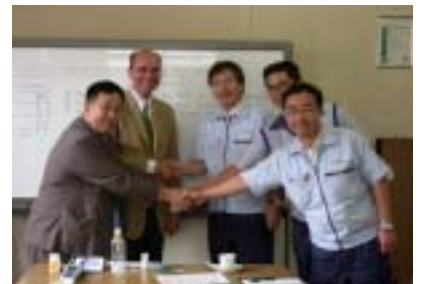
最後に調査にご協力を頂いた5社に、心からお礼を申し上げるとともに、益々のご発展を願ってやまない。



アルファ・エレクトロニクス(株)にて



(株)秋田新電元社員と名刺交換挨拶



三浦電子(株)にて



小林工業(株)にて



(株)三栄機械にて

## 私からのPRメッセージ!

### 山師の学校

秋田大学工学資源学部長 吉村 昇



秋田大学  
工学資源学部長 吉村 昇

秋田大学大学院工学資源学研究科(平成14年3月まで鉱山学研究科)には教養的共通科目がいくつかあるが、その一つに「ベンチャー起業論」が平成10年度から開講されている。(株)アイアイエスマテリアルというベンチャー起業を実際に推進した東京大学生産技術研究所の前田正史教授、日本政策投資銀行の菊地伸氏、日本学術振興会林和弘総務部長(当時)らに講師をお願いした。

今の日本は元気がない状況にある。アメリカの80年代とよく似ているとも言われている。悪いのはみんな大学であるとも言われている。では何故アメリカは元気になったのか。大学の技術を利用した企業やベンチャーが成長しているからだと言われ、出羽の神が出没している。いわく、アメリカでは、スタンフォードでは、MITでは、本当にそうなのだろうか。

ベンチャーとは元来“冒険”ということである。そうであるならば、かつて“山師の学校”と言われた秋田鉱山専門学校の精神そのものではないかとつくづく感じている。明治43年(1910年)明治の三大財閥岩崎久弥、藤田伝三郎、古河虎之助の三氏がこの地秋田に今風に言えばベンチャーキャピタリストとして投資して鉱山業の技術革命が初めて実現できたのではないかと感じている。この精神的伝統を今の大学生、大学院生に引き継いでもらいたいという思いが「ベンチャー起業論」の開設へとつながったのである。

さて、戦国時代の山師とは、金山銀山を開発して、金銀を採掘した者、江戸時代の山師は、普請の請負師、明治以降は投機的な事業にたずさわる者とも言われている。他には「鉱山師」と書いて「やまし」と呼ばせることもある。何となく胡散臭いイメージがあるが、実は今の「ベンチャー」につながるのではないかと感じている。学生に「山師」とは何かと聞いても、きちんと理解していない様子である。更に、残念ながら今の学生には「山師」の気風が少ない。時代が変わったからと言えばそうかも知れないが。

4月より、学部長になり研究室の学生とのコミュニケーション、ノコミュニケーションがめっきり減ってしまったのが、悩みでもあり、反省点でもある。学生との対話、これが大学教育の原点であると思っている一人として、「山師の精神」のかけらは持たせて社会へ送り出すべく努める覚悟である。





秋田県立大学機械知能システム学科  
コンピュータ援用設計学講座  
教授 日置 進

秋田県立大学システム科学技術学部  
機械知能システム学科 コンピュータ援用設計学講座

教授 日置 進

『システム思考』と『モノづくり』、『地域社会の持続的発展に寄与すること』を基調として研究教育を実施するには、従来型の『研究一筋』の発想からの転換が必要であり、新しい科学技術を如何に産業に活かして事業化するか、同時に現在の事業を円滑に推移させるか、また、従来から蓄積されている技術を活用して産業の発展と事業の活性化につなげるか、を実践できる、科学技術の事業化に関するセンスを持つことが要求される。

このような観点から、現在 我が研究室では佐藤俊之講師、高橋武彦助手をスタッフとして、博士課程の学生1名、4年生の卒論の学生7名と共に、直近に事業化への成果を出せる**フェイズの研究**として「秋田県沖日本海固有海洋深層水に関する研究」、「鉛フリーはんだの設計データの蓄積」、中期的に成果を出す**フェイズの研究**として「マイクロアクチュエーターの開発」、「真空容器用アルミニウムの精密溶接に関する研究」、長期的に取り組んで成果を出す**フェイズの研究**として「マイクロロボットの開発」、純粋な基礎研究である**フェイズの研究**として「適合原理による制御理論に関する研究」を研究開発のテーマとしている。

研究のアプローチとしては、テーマに関係する企業や公設研究機関ならびにその現場と密接に連携して、事業化を想定して問題点を把握しながら研究計画を立案し実施している。以上が、私の大学での研究生生活10年、以後の企業における研究開発、とその事業化に関する約30年の経験をもとにしたマネジメントポリシーである。

関係各位のご活用を期待しております。



秋田県立大学経営システム工学科  
経営情報システム学講座  
助教授 嶋崎 真仁

本荘キャンパスを地元産業界の『学びの場』に！

秋田県立大学システム科学技術学部  
経営システム工学科 経営情報システム学講座

助教授 嶋崎 真仁

今年度から秋田県立大学に大学院システム科学技術研究科が設置されました。最初の学部卒業生を送り出すより1年早くスタートしたこともあり、社会の方が大学院の1期生として入学されました。

私が所属する経営情報システム学講座には博士前期課程4名、後期課程1名の合計5名が在籍しています。その全員が社会経験豊富な方々です。このうち2名は昼間働きながら時間をやり繰りして大学へ来られています。年齢や勤務時間上の制約を乗り越え自己研鑽に励もうとされる社会人大学院生を応援するため、講座の教員スタッフ一同も、勤務時間外で残業代も出ませんが、水曜日には夜24時近くまで研究指導を行なっています。

学校を卒業して社会人となっても、職務遂行中に新しい知識獲得に迫られる場面は数多くあると思います。また、それは倒産やリストラから身を守らねばならない企業にとっても、個人にとっても切実な問題です。さらに、国際競争が激化し、高度な経営企画や商品開発が企業内外から求められています。これらに対応する意味で、大学教員の持つコンセプトやデータを扱う力などを学び取り、企業内でその方法を適用していくことは、長期的な企業存続に有効です。このような認識のもと、経営企画能力の向上支援を目的とした大学・大学院のあり方について、所属講座の共通テーマのひとつとして取り組んでいます。

そこで、この場をお借りして皆様にアピールがあります。本荘キャンパスを地元産業界の『学びの場』としてもっと積極的に活用されませんか。大学や大学院のカリキュラムを有効活用し、県大で学んだ方を中心に地元企業が「知の高度化」を図れば、地域活性化の切り札として本荘キャンパスを誘致した本来の目的が叶うと思われます。公開講座などへ参加されるだけでなく、実質的な能力向上のために科目聴講制度や大学院への入学など、効果的に本学を活用して戴ければと思います。今年度入学された「社会人大学院生」の後に続く方を期待します。

## オラほの会社も会員だべ！



### 天寿酒造株式会社

所在地：由利郡刈羽町城内字八森下117

：0184-55-3165

FAX：0184-55-3167

代表者：代表取締役 大井建史

創業：明治 7年 9月 10日

製造品：酒

### 天寿のご紹介

天寿の酒は強い個性はないが、ホッとする酒だといわれます。私共は思いを込めてやすらぎの酒を目指し醸しております。東北の霊峰烏海山の麓に蔵を興して129年、昔からこの地に根ざした酒造りにこだわり、その気候と清冽な水を巧みに使い、原料米は歴史ある天寿酒米研究会と共に納得ゆくまで原料米から育て上げ、そして何よりも伝統ある蔵人の匠により今も銘酒の歴史を守っております。

創業は明治7年(1874年)、二代目大井永吉が酒造りを始め、以来、当主は代々永吉を名乗り、現在の永吉は六代目です。

酒名の天寿は百歳まで幸せに生きることの意味です。ラベルの文字は、2000年前中国山東省の泰山の磨崖に刻まれた金剛経から写したものです。歳月だけが刻むことの出来る風格を酒の味に生かし、またお客様への長寿の願いが込められております。

この地元に根ざした酒造りを考え、起こしたのが「天寿酒米研究会」です。六代目の「酒造りは米造りから」という考えから昭和58年に発足し、蔵人を中心に農家27軒25hrのグループで、酒造好適米「美山錦」の栽培に取り組んでおります。

秋田県で出来る最上の酒造好適米を目指し、毎年勉強会を行い、13年前から完全無農薬米にも挑戦し、生活排水も一切入らない田圃で社員全員での草取りや、アイガモ農法を取り入れながらがんばっております。

私どもはこれからも、「ホッとする酒、やすらぎの酒」を目指し、思いを込めて益々がんばってまいります。



天寿酒造(株)蔵元

## 株式会社 大 沼 組

所在地： 由利郡東由利町蔵字蔵113-2  
： 0184-69-2425  
FAX： 0184-69-2427  
代表者： 代表取締役 大井 武且  
創 業： 大正10年  
従業員： 32名  
製品： 建築



株式会社大沼組  
代表取締役 大沼 武且

株式会社大沼組は、大正十年の創業以来八十数年、より良いものを、確かな技術力で社会に提供する事を一番の目標として経営を続けております。豊かな自然を活かしながらも、暮らしやすい環境を望む事はこの地域に暮らす人なら誰でも思い描くことであろうと思います。私たち建設業は、その生活の基盤となる、社会資本整備の担い手として重要な役割を果たしているという自負がありますし、良質の建設造物として社会へお納めすることが、私たちの基本的な使命であると考えております。

昨今の国の政策として公共事業の削減、社会資本整備の縮小が叫ばれており、他産業においても厳しい状況の中、我々建設業界もますます厳しい時代になってまいりました。

しかし、このような状況であるからこそ、より良質なものを、より低コストで提供できるように努めるのが企業の使命であると考えます。そのためにもわが社では、会社内の情報化に取り組み、環境問題にも対応し、また ISO の取得も視野に入れて、日々発展し時代に必要とされる企業としての努力を積み重ねております。また、技術的には秋田県の優良工事表彰を5回にわたり受賞した実績も残しております。「信頼と技術の大沼組」はもちろんの事、これからの時代に対応する「安心とサービスの大沼組」を目指し、社会資本の充実に貢献できるよう、また、地域に根ざした企業として皆様に安心を提供できるように努力する所存でございます。



(株)大沼組 社屋



# INFORMATION

日時・場所		
<p>12月6日(金) 午後2時～4時30分</p> <p>本荘由利産学共同研究センター</p>	<p><b>第5回産学活性化テクノセミナー</b></p> <p>講演1「21世紀に展開するセラミックス」 秋田大学工学資源学部教授 中川善兵衛氏</p> <p>講演2「循環型社会構築のための セメント産業の役割」 太平洋セメント(株)建材事業推進室長 岡本享久氏</p>	<p>主催：秋田大学地域共同研究センター (財)本荘由利産業科学技術振興財団</p> <p>共催：本荘由利テクノネットワーク 申込みは、産学共同研究センター 0184-22-3488 に連絡下さい。</p>
<p>12月13日(金) 午後1時30分～4時30分</p> <p>本荘由利産学共同研究センター</p>	<p><b>精密工学会東北支部技術講演会</b></p> <p>講演1「精華大学における自由曲面光学レンズ の計算機制御加工技術」 中国・精華大学教授 馮之敬氏</p> <p>講演2「ナノテクノロジーとその周辺技術 (計測を中心として)」 東北大学大学院工学研究科教授 清野 慧氏</p>	<p>主催：精密工学会東北支部 共催：秋田県生産技術研究会 (財)本荘由利産業科学技術振興財団 本荘由利テクノネットワーク 秋田県立大学産学技術懇談会</p> <p>申込みは、県立大機械知能システム学科 呉 勇波講師 0184-27-2144 までメ-ル 連絡下さい。wuyb@akita-pu.ac.jp</p>
<p>12月16日(月) 午後1時～5時 12月17日(火) 午前10時～午後4時 (2日間・各日先着30名)</p> <p>本荘由利産学共同研究センター</p>	<p><b>島津製作所 異物解析セミナー(無料)</b></p> <p>16日午後1時～5時 X線透視・CT装置による非破壊検査のアプリケ-ションのご紹介・お客様の試料測定をしながら機能説明。</p> <p>17日午前10時～12時 X線透視・CT装置による非破壊検査のアプリケ-ションのご紹介。 午後1時～4時 お客様の試料測定をしながら機能説明。 X線透視装置SMX-1000のミニ分析センタ-及び装置を展示します。</p>	<p>食品、化学、電機、半導体分野をはじめ様々な業界において、X線透視装置が広く利用されるようになりました。セミナーでは、試料の異物観察を行いながら多様なアプローチによる解析手法をタイムリ-な測定事例を交えながらご紹介いたします。</p> <p>申込みは、産学共同研究センター 0184-22-3488 まで</p>

## .....編集後記.....

「HY-TecNet通信」第11号に、ご寄稿いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

第11号では、10月25日(金)に開催されました第3回HYKK異業種交流フォーラムの内容を特集しました。報告担当されました幹事の皆さんご苦労様でした。また、9月5日、6日に地域企業5社をヒアリング調査されたハンブルグ工科大学ヘルシュタット教授より、メッセージをいただき原文を掲載しました。

株式会社三栄機械 細矢社長様が、本会の代表代行に就任されたことにより役員体制も固まりました。尚一層のご活躍をいただくとともにご指導をよろしく申し上げます。

第11号の編集作業が大幅に遅れ、皆様への配布が11月の半ばになりましたこと、深くお詫び申し上げます。(事務局編集班、印刷局も大変です。)次号は、年明け1月です。今度は遅れないように頑張りますので、ご支援、ご協力よろしく申し上げます。

編集委員：須藤一知(幹事長)、吉原敏郎、高橋幸治、佐々木英功、辻川新二郎、斎藤民一(幹事)

HY-Tec Net 事務局	：(株)秋田新電元飛鳥工場内	TEL 0184-24-4206	FAX 0184-24-4226
HY-Tec Net 連絡窓口	：本荘由利産学共同研究センター	TEL 0184-22-3488	FAX 0184-23-7460